

---

# 探偵事務所?時雨?

真織

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

探偵事務所？時雨？

### 【Nコード】

N2103K

### 【作者名】

真織

### 【あらすじ】

探偵事務所？時雨？。

それぞれに様々な過去を持った探偵や助手達が、事件を解決して本当の絆や仲間の大切さを知る。

## cast

cast（一卷編）

藤代 晶

高校2年生で、探偵事務所の助手になる。  
特に目立つ技術も無く、いたって普通の高校生。

梓沢 友梨

いつも明るく、クラスのムードメーカー的存在。  
兄が行方不明になり、事務所に訪れる。

白姫

探偵。

見た目は子供だが、能力は未知数に近い。  
本名不明。

助手

藤代 晶

（cast参照）

古都 璋

お嬢様口調だが、優しく少し臆病。  
機械系を弄るのが得意。

園崎 千

ほわほわしていて、天然。

だが、拳法・柔道・空手等、格闘系は強い。

綴 歩霧

無口、素性不明。

璋の前ではよく喋る。

## 一巻

### 一巻

事件とは？時雨？そのものだ。分かるか？

白銀の髪を身にまとった幼い少女はそう言った。

昔の僕なら、事件とか探偵とか本当にどうでも良いものだっただろつ。

……普通に平穏な日々を過ごし。

……普通に他愛のない話をして。

……普通に友達と話して。

……普通に家族と接して。

……普通に姉さんという事ができただろう？

どうして、姉さんはあの時……僕を置いて行ったのですか？  
姉さんの考えている事が……今の僕には分からない。

## 一章

日曜日。

休日に、僕はある建物を見つめる。

扉の看板には

『探偵事務所 時雨』

と丸っこい可愛いらしい字で書かれてある。  
その看板の下に『助手募集』と書かれた紙。  
そう。

僕は、此処の助手になる！

と思つて来たものの。

どうすれば良いんだろう。

建物は古いし、人がいそうも無いな……。

とりあえず、ノックを……。

そう思つて扉に拳を近づけた時。

「ちょっと、何をこそこそとやっていますのっ!？」

少女の声と共に、扉が物凄い勢いで開いた。

あまりに突然過ぎて、僕は少し後ずさる。

「え、えと……此処の、じよ、助手に……」

やばい、噛みまくってる。

昨日、あんなに練習したのに。

「助手希望ですこと？ じゃあ、中に入って下さい」

今時珍しい口調で話す少女は、ふわふわの短い髪を揺らして僕を  
建物の中に招き入れた。

「この部屋ですわ。探偵さんがいるのは」

そう言つて、部屋のドアを数回ノックし開く。

部屋にいたのは、真つ黒な髪を無造作に結つた男と白銀の髪の女の子だった。

「……ん？ 璋、そやつは誰だ？」

白銀の髪の子が尋ねる。

部屋の中は、古本やら雑誌やらが散らばっていてパソコンの可動する音が響いていた。

「助手希望だそうですわ。えと……お名前は？」

璋と呼ばれたふわふわの髪の少女は、僕の方を向いて言う。

「藤代です。……藤代、晶」

「名前の字は」

僕が名前を言つと、黒髪の男が怪訝そうな顔で言う。

……怖いんですけど。

「晶と書いて、ひかると読みます」

視線を泳がせながら、答える。

「うん。分かった。じゃあ、採用！ 璋と晶、適当に此処の説明しておいて」

白銀の女の子は、それだけ言つと部屋のベットに潜り込んだ。

「で、説明は終わり。因みに、ボクの名前は晶。宜しく」

無造作に結つた髪が特徴的な男は晶というらしい。

歳を聞いたら僕と同じ年齢だと言つから驚いた。

……つてきり、年上かと……。

「私は璋。こんな喋り方ですけど、機械なんかは強いんですよ。」

宜しく願いますわ」

ふわふわのショートヘアに薄茶色の目が可愛らしい少女は璋という名だと。

とりあえず、璋と千の説明で分かった事。

一つ目、依頼があれば全力を尽くすという事。

二つ目、探偵助手同士仲良くする事。

三つめ、不謹慎な行動は慎む事。

……って、事務所の事全然分からないじゃないかっ！

と口を挟もうとした。

でも、入ったばかりだし……。

慣れていけ、って事だろうか……。

「いいか。事件とは？時雨？そのものなのだ」

部屋に凜と響く、幼い少女の声。

白銀の髪をベットに流し、いつの間にか起き上がっている少女。話によると、この子が此処の”探偵”なんだそうだ。

……って事は、璋や千は助手なのか。

「白姫。おいらの事はそう呼んでくれたまえ」

「白姫、おいらって言うな」

白銀の少女は、びゃっき、と言うらしい。

璋に漢字を訊くと、白い姫と書いて白姫だそうだ。

璋は、しらひめ、って呼んでいるらしいけど。

白姫のおいら、という一人称に千が注意をしている。

とりあえず、大まかな説明だけしてもらって自宅に帰った。

人生でもっとも長い日曜日だったかも知れない。

## 二章

翌日。

学校が終わってから、またあの事務所に行った。

扉を数回ノックすると、ギツ……と古めかしい音を立てて扉が開いた。

顔を出したのは、見た事の無い少年だった。

「……誰」

見た目より、低い声で尋ねる。

視線が痛い。

「昨日から、助手になった……晶、です」

そう言うと、中に入れてくれた。

やはり、また昨日と同じ部屋に入らされる。

ベットには、白姫がそしてソファーには緩く前髪を結わえた子が座っていた。

ん……？

あの、前髪を結んだ子……同じクラスの梓沢さんじゃないか？

「……梓沢さん？」

「えっ」

僕が訊くと、その子はびくりと肩を震わせる。

「僕、同じクラスの藤代だけど……どうしたの？」

「あ……藤代君。えへへ、よく分かったね……あたしのコト」

やっぱり梓沢さんか。

でも、様子がおかしい？

梓沢さんは、いつもクラスじゃムードメーカー的存在で周りをパ  
アと明るくする様な雰囲気があるけど。

今日は、とても……暗い。

「ふむ。事件だよ、事件。こやつのが行方不明になったそうだ」

白姫が言う。

梓沢さんのお兄さんが、行方不明……？

何とも言えない感覚が胸を抉る。

姉さんっ、何処に行くの、姉さんっ！

付いて来ないで。晶には関係無い。

関係あるよっ！ だって、姉さんは……姉さんは、僕の……っ

「晶、晶よ。聞いているのか？」

「え、あ……ごめん、何？」

「まったく……しっかりしてくれたまえよ」

「うん……ごめん」

僕はブンブンと首を振って昔の記憶を消す。  
ダメダメ、今は昔の事なんて考えちゃ。

「で、白姫。梓沢さんのお兄さんが、どうして行方不明なの？」

「それを調べるのが依頼だよ。見付けるのも兼ねてね」  
「……迷惑なのは、分かってるんですけど……あたし一人じゃ、ど  
うにもならなくて……」

白姫の言葉に、梓沢さんが申し訳無さそうに言う。  
声は微かに震えていた。

### 三章

……大体的話は分かったが、少し整理しておこう。

まず、梓沢さんのお兄さんがいなくなったのは四日前だったこと。梓沢さんの両親は幼い頃に他界していて、兄との二人暮らしで、お兄さんのバイトのお金で生活していたこと。

「……話の筋は分かった。こちらにも考えたいことがあるんでな。また明日、同時刻に来ることはできるか？」

白姫はそう言うと、ベットに不安定に置かれている菓子をポリポリと食す。

向こうは真剣だっというのに……本当に、探偵なんだろうな？

「……分かりました。いきなり押しかけてしまってすみません。あたしの携帯番号とメールアドレス、ここに置いときますね。……失礼します」「了解だ。歩霧、娘を事務所の出口まで送って行ってやれ」

さっきの無愛想な男の子は歩霧というのか。

歩霧は、白姫の言葉を聞くと、梓沢さんと部屋を出て行った。

「ふむ。……困ったものだね」

二人が出ていったと同時に白姫が唸る。

「情報が少なすぎる？」

「まったくその通りだよ。見た目によらず、察しが良いね」

「……少し傷ついた」

軽々と酷い事を言うじゃないか。  
菓子を食いながら。

「まったく……梓沢とやらの兄はどうも妹思いらしいからね。急に  
いなくなる様な理由が全く見当たらない」

たしかに言われてみると、そうかもしれない。

「うん……。梓沢さんは、普段とても明るいからね。あそこまで暗  
いのは驚きだよ。……お兄さんが行方不明ともなれば、当たり前だ  
けどね。他に頼りも無いんだから」

「そうなのか？ おいらは、てっきりアレがいつも通りだと思って  
いたよ」

「いつもは友達と一緒に楽しそうに話してるよ」

「……成程。兄の行方については大して深くは無さそうだが……し  
ばらく一人で考えさせてもらおうか？ 今日は帰って良い。歩霧も  
戻ってきたら帰らす」

「……そう？ じゃあ、今日はもう帰るよ」

僕はそう言って、白姫の部屋から出た。

梓沢さんのお兄さんが行方不明……か。

## 四章

「梓沢さん」

「……えっ？ ……あ、藤代君。どうかした？」

「いや……特に用は無いんだけど……。ちょっと様子が気になって、  
というか……」

「心配してくれてる？ あはは、そんな真剣な顔しないでよー……  
あたしは、全然平気だからさ」

次の日、学校で梓沢さんに話し掛けてみたけれど……一方的に話を切って、梓沢さんは女の子の友達の輪に入ってしまった。  
……どうしよう。

平気、とは言ってるけれど事務所に相談しに来た時点で平気というのはキツイだろう……。

……はあ……。

「……で、君の兄はいなくなる前に何か言ってたかね？」

「……いいえ」

「ふむ。……では、君が兄の口から聞いた最後の言葉は何だ？」

「……えっと……確か、『友梨は母親似だよな』って……」

「母親似？ 意味深な発言ですわね」

学校が終わってから梓沢さんと事務所に行き、今、梓沢さんは質問攻めにされている。

今日は璋と歩霧がいて、璋は白姫のベットに座りながら、ノートパソコンのキーボードを叩いている。

「母親似、というと、兄は父親似だったりするのかね？」

「……いえ。うちの父親はあたしが生まれる前に死んでるんです……だから、お兄ちゃんとは本当の兄妹じゃ無いんです」

「……！……どうして、そういう事を先に言ってくれないんだ……」

「……ごめんなさい……あまり、関係無いと思って」

白姫の声で梓沢さんが縮こまる。

「つまり、その兄上とは血が繋がってなくて、父上は母上の再婚相手なのですかね？」

璋は一瞬キーボードを叩く手を止め、確認するように尋ねる。

「……そういう事です……」

梓沢さんは言い難そうに顔を顰め、俯く。

……何か問題でもあるのかな？

「……はあ。君の家系はどうも複雑だねえ。……しかも、どんどん人が居なくなってるよ」

確かに。

本当の父親は梓沢さんが生まれる前に他界。

実母と義父も数年前に他界。

そして今回。

お兄さんが行方不明。

「……そう、なんです。だから、あたし怖いんです。もしかしたら、あたしのせいでお兄ちゃん居なくなっちゃったのかなって……」

「ん？ それは、どーいう意味かい？」

「だから、あたしの周りに居る人は今探偵さんが言った通り、どんどん死んでいっちゃうから……あたしのせいかもって」

「……はは。笑わせてくれるなよ。全く、君も自分を責めるのはよしたまえよ。いつか心が崩壊する」

白姫は梓沢さんの言葉をさらりと受け流す。

その後も、幾つか質問をされて、梓沢さんは事務所を出た。事務所に残ったのは、僕と白姫と璋と歩霧。

「はい。コレ、さっきの話のまとめですわ」

璋は、白姫に数枚の紙を渡す。

「どうやら、さっきの話をまとめたモノらしい。」

何を一生懸命打っているのかと思えば、それが。

「……まだ、何か隠してるな」

歩霧が凜とした声で言う。

「……ですわね。どうしても知られたくない……って感じですよ」  
「全くだよ。おいら達に相談するなら、包み隠さず話してほしいものだね」

ん？

この三人は、何の話をしているのだ？

「ええと……皆、何の話をしてるの？」

「……分からないのか？ 友梨とやらについてだよ」

僕が尋ねると、白姫はそう言った。  
梓沢さんが、どうしたっていうんだ？

「……友梨の兄の携帯は？」

「さっき通話履歴を調べましたが、それらしい物は無かったですわ」

歩霧に璋が答える。

「……こいつ、人の通話履歴なんか調べられるのか……。  
どうやってシステムに入ってたんだよ……。」

「ん……あ、そういえば、まだ友梨さんの兄上の名前を聞いていませんわね。白姫、どうなんですか？」

「梓沢竜成、だよ」

「そう……？梓沢竜成？つと……。」

璋は白姫の言葉を聞くと、直ぐにパソコンに向き直り、カタカタとキーボードを打つ。

どうやら、白姫達の会話を聞いていると、梓沢さんはまだ？何か？を隠しているらしい。

カタカタ、カチャ。

ポリポリ……。

必要最低限の物しかない（恐らく白姫の）部屋には、璋がキーボードを打つ音と白姫がお菓子を食べる音だけが響く。

「……！……どーいう事ですの……」

急に璋がキーボードを打つ手を止め、パソコンの画面を凝視する。  
……どうしたんだ？

「どうした、璋よ」

「友梨さんの兄上……梓沢竜成は、親殺しの犯人で指名手配中ですよ……」

## 五章

事件はいつでも思わぬ方向に転がり込む。

……僕みたいな、ただの高校生が入り込んでいい世界なのか分からない。

でも……それでも、僕は向かい合わないといけない。

それがどんなに辛い結末だろうと。

「それは、どういうことだ、璋!!」

白姫はベットから立ち上がり、璋を押し退けてパソコンの画面を見る。

白姫の綺麗過ぎる目が忙しく動く。

しばらくすると、一通り読み終わったのか、白姫は顔をしかめながらパソコンが離れ、またベットに座り込む。

「困ったものだよ、本当に……。隠している事はコレか……」

白姫は唸りながら言う。

「何か?の部分が分かったのかな……?」

「歩霧さんと晶さんも見た方が良いでしょう」

璋はそう言うと、僕等の方にパソコンのディスプレイを向ける。

画面に書いてあったのは、ある事件の内容だった。

大きく?脅威の親殺し! 犯人未だに捕まらず?の文字がまず目に入る。

そして、その下に犯人と思われる人の顔写真と名前。

名前には、しっかりと『梓沢 竜成』と書いてある。

写真を見ると、悪戯っぽい目が梓沢さんにそっくりで、嫌でも梓沢さんの兄だと実感させられた。

「つまり……梓沢さんのお兄さんは、親殺しの犯人で……今、逃走してるってこと？」

僕は声を絞り出す。

もしかしたら、声が震えていたかもしれない。

「……そついう事になるな」

隣で歩霧が言う。

「でも、逃走していると考えるとかなり不自然ですわよ。……だつてこの事件、相当昔ですもの」

「うーん……。それはそうかもだけど……でも梓沢さんはこの事を知ってるか」

僕は璋にそう返しながら、白姫に視線を移す。

白姫は真っ白な手を顎に当て、悩む様に目を伏せている。

「……璋、携帯を貸してくれたまえ」

「……？ ええ、いいですわよ」

白姫は急に目を開け、璋にそう言った。

璋はベットに置いてある如何にも女の子らしいシヨルダーバックから、薄桃色の携帯を取り出し白姫に手渡す。

白姫はベットの横の机から、白い小さなメモを取り出し携帯を弄り、耳に当てる。

あのメモは……梓沢さんの携帯番号とメールアドレスが書かれた紙……？

「白姫、ちょっと失礼致しますわ」

璋は白姫が耳に当てている携帯の後部に、何かコードの様な物を差し込む。

すると、璋の足の上にあるパソコンから聞きなれた機械音が鳴る。どうやら、スピーカーのようだ。

トウルルル……。

トウルルル……。

『……もしもし』

いつもなら、梓沢さんのハスキーな声が聞こえてくるはずがパソコンのスピーカーから聞こえてきたのは凶太い男の声だった。

「もしもし。……梓沢友梨とやらが居れば代わってもらいたい」

『誰だ、お前は。名前と用件を先に言え』

「名前は藤代晶。友梨の友人だ。用件は明日の行事予定についてだ」  
『本当だろうな？ それ以外の事は話すんじゃないぞ』

おいおい、何勝手に僕の名前を使ってるんだ。

ていうか……あの変な男は誰なんだ？

『……もしもし。電話代わりました、友梨です』

しばらくすると、梓沢さんの声が聞こえた。

「もしもし。探偵事務所？時雨？の白姫だ。友梨とやら、其処は何処なんだ」

『……え？ え、えっと……ごめんなさい……』

梓沢さんは、白姫の質問に答えない。

本当に……梓沢さんは何処にいるんだろう……。

「答えられないのなら、それでもいい。……それとだ。君はどうも隠し通したかったらしいが、君の兄とやらについて調べさせてもらったよ」

『そんな……！ か、勝手な事をしないで下さい……』

パソコンのスピーカー越しに聞こえる梓沢さんの声は、どこか震えている気がした。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2103k/>

---

探偵事務所?時雨?

2010年10月10日03時26分発行